

ポイントチエック

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(土佐・改)

今は昔、源雅通の中将といふ人ありき。その家は、四条よりは南、室町よりは西なり。

かの中將、その家に住みける時に、二歳ばかりの児を乳母抱きて、南面なりける所にただ独り離れ居て、児を遊ばせけるほどに、俄に

児のおびただしく泣きけるに、乳母もこのしる声のしければ、中將は北面に居たりけるが、これを聞きて何事とも知らず、太刀をさげて走り

行きて見ければ、同じ形なる乳母二人が中にこの児を置きて、左右の手足を取りて、引きしろふ。中將、あさましく思ひて、よくまもれば、と

もに同じ乳母の形にてあり。何れか実の乳母ならむといふことを知らず。然れば、一人は定めて狐などにこそはあらめと思ひて、太刀をひらめかして走りかかりける時に、一人の乳母、かき消つやうに失せにけり。

その時に、兒も乳母も死にたるやうにして伏したりければ、中將、人どもを呼びて、験ある僧など呼ばせて、加持せさせなほしければ、とばかりありて、乳母、例の心地になりて起き上がりたりけるに、中將「いかなりつる事ぞ。」と問ひければ、乳母のいはく、「若君を遊ばかしたてまつりつるほどに、奥の方より知らぬ女房の俄に出で来て、これは我が子なりと言ひて奪ひ取りつれば、奪はれじと引きしろひつるに、殿のおはしまして、太刀をひらめかして、走りかからせたまひつる時になむ、若君もうち棄てて、その女房奥さまへまかりつると言ひければ、中將いみじ

く恐れけり。されば、人離れたらむ所には、幼き児どもを遊ばすまじき事なりとなむ人言ひ

く恐れけり。されば、人離れたらむ所には、幼き児どもを遊ばすまじき事なりとなむ人言ひ

(注) 乳母＝母親に代わつて、子を養育する女性。

南面なりける所＝南向きの部屋。

引きしろふ＝引っぱりあつてゐる。

験ある＝加持祈禱の力の強い。

〔今昔物語集〕より

〔1〕「仮名づかい」——線④「かき消つやうに」を現代仮名づかいで書き直しなさい。

〔2〕「古語の知識」——線①②③④⑤⑥のそれぞれの意味として最も適切なものを、次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 〔a〕「今は昔」
  - ア 今も昔も変わりなく
  - イ 今が昔か、昔が今か、分からないが
  - ウ 昔よりは今が大切なのだが
  - エ 今では昔のことになったが
- 〔b〕「ののしる声」
  - ア 悪口を言う声
  - イ 泣き叫ぶ声
  - ウ 口論する声
  - エ 大声でわめく声
- 〔c〕「あさましく思ひて」
  - ア 浅はかで愚かだと思つて
  - イ 気をしっかり持つて
  - ウ あまりのことに驚いて
  - エ 嘆き悲しんで
- 〔d〕「よくまもれば」

ア 注意してよく見ると  
イ 兎をかばうと  
ウ 武器をかまえること  
エ 目をぐるぐるまわして

□(e) 「例の心地」  
ア 驚きの気持ち  
イ 平常の気持ち  
ウ 例のないような気持ち  
エ 悲しい気持ち

□(f) 「奪はれじ」  
ア 奪われてしまう  
イ 奪われまい  
ウ 奪われてしまった  
エ 奪い返そう

a
b
c
d
e
f

□(3) 係り結びの法則 □に入る最も適切なことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア けら イ けり  
ウ ける エ けれ

□(4) 内容をつかむ — 線①「源雅通の中将」、②「二歳ばかりの兎」は、本文中の他のところで、それぞれどう呼ばれていますか。「中将」「兎」という語を使わずに、どちらも一語で答えなさい。

□(5) 指示語をつかむ — 線③「これ」は何を指していますか。現代語に直して答えなさい。

①
②

□(6) 会話文を指摘する — 線⑤「乳母のいはく」とありますが、「乳母」が語った内容はどこまでですか。終わりの五文字で示しなさい。

-----
-----
-----

□(7) 内容をつかむ — 線⑥「知らぬ女房」の正体を、「中将」は何であると推測していますか。本文中より書き抜いて答えなさい。

--

□(8) 主題をつかむ この話は読み手にある教訓を語りかけています。それはどういうことですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 世の中には、常識では信じられないようなことが起こり得る。  
イ 幼い子どもを一人離れた所へ放っておくのは危険である。  
ウ 親は子どもの世話を、けっして他人まかせにしてはならない。  
エ かわいい子どもは、だれもが自分のものになりたいと思うものだ。  
オ 何事も落ち着いて勇気を出して行動すれば、なんとかなるものだ。

--

□(9) 文学史の知識 「今昔物語集」の①文学上のジャンルと②成立した時代をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

□① ア 随筆 イ 物語 ウ 説話 エ 評論  
□② ア 奈良 イ 平安 ウ 鎌倉 エ 室町

①
②

【現代語訳】 今では昔のことになったが、源雅通の中将という人がいた。

その家は、四条よりは南、室町よりは西にあった。

その中将が、その家に住んでいた時に、二歳ぐらいの（中将の）子を乳母が抱いて、南向きの部屋にただ独り（家の人たちから）離れてすわり、子を遊ばせているうちに、急に子がひどく泣くうえに、乳母も大声でわめ

く声が出たので、（その時）中将は北向きの部屋にいたのだったが、これを聞いて何事が起こったのかわからなかったが、太刀を手に持って（そこへ）走って行って見たところ、同じ顔をした乳母二人が間にこの子を置いて、左右の手足を取って引っぱりあっている。中将は、あまりのことに驚いて、注意してよく見ると、二人とも同じ乳母の顔形である。どちらが本

当の乳母であるかということがわからない。そこで、一人はきつと狐など（が化けたの）に、違いないと思つて、太刀を（抜いて）光らせながら走りかかった時に、一人の乳母は、かき消すようにいなくなつてしまつた。

その時に、子も乳母も死んだようになって倒れ伏していたので、中将は、召し使いたちを呼んで、加持祈禱の力の強い僧などを呼んで来させ、加持をさせたりしたところ、しばらくして、乳母が、平常の気持ちになつて起き上がったので、中将が、「どうした事なのか。」と尋ねると、乳母が言う

には、「若君を遊ばせ申しあげておりました時に、奥の方から見知らぬ女房（＝仕えている女性）が突然出て来て、「これは私の子だ」と言つて（若君を）奪ひ取つたので、奪われまいと引っぱり合つていたところに、殿がおいでになつて、太刀を光らせて、走りかかりなされた時に、若君を棄てて、その女房は奥の方へ行ってしまいました。」と言つたので、中将はたいそう恐ろしく思つた。

だから、人氣（ひとけ）のないような所では、幼い子などを遊ばせては

ならない事であると（世間の）人は言つた。

(1) 【仮名づかい】 歴史的仮名づかいを現代仮名づかに直すときにはいくつかの原則があります。

① 「ゐ・ゑ・を」⇨「い・え・お」

例 むどいど。 こゑ↓こえ。 をかし↓おかし。

② 「ぢ・づ」⇨「じ・ず」

例 ふぢの花↓ふじ（藤）の花。 まづ↓まず。

例外 「はなぢ」「つづく」など。

③ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」⇨「わ・い・う・え・お」

例 あはれ↓あわれ。 思ひ出↓思い出。 にほふ↓におう。

④ 母音「a・i・e」にu音が続くと長母音になる。

例 a u（アウ）↓o（オー）

例 やうす↓ようす。 あふぎ↓おうぎ。

例 i u（イウ）↓yu（ユー）

例 いうれい↓ゆうれい。 しうり↓しゅうり。

例 e u（エウ）↓yo（ヨー）

例 てうし↓ちようし。 けふ↓きよう。

⑤ 「くわ・ぐわ」⇨「か・が」

例 くわし↓かし（菓子）。 ぐわんじつ↓がんじつ（元日）。

(2) 【古語の知識】 古語には、現代語にないことばがある他、現代語と同じ音で意味の異なることばもあります。代表的なものを挙げておきます。

A 現代語にない古語

いみじ＝なほだしい、すぐれている、ひどい。

つきづきし（付き付きし）＝（いかにもびつたりしている感じ）似つかわしい。

ゆかし（動詞「行く」に対応する形容詞で、心が対象に向かつて強く引かれる感じ）見たい、聞きたい、知りたい。

らうたし（「労いたし」が簡略化したもので、何かと世話をしていたわつてやりたい気持ちを表す）かわい。

わりなし（「理なし」という意味。道理に合わず、どうにも解決のできない迷いの気持ちを表す）理屈に合わない、やむをえない。

## B 現代語とは意味の異なる古語

あたらし（惜し）惜しい、残念だ。

あはれなり（うれしいにつけ、悲しいにつけ、「ああ、はれ」と心から発する感嘆の声からできた語）しみじみした趣がある。

ありがたし（有り難し）（あることがむずかしい）めったにない。

いたし（「程度がはなはだしい」が基本的意味）ひどい、すばらしい。いたづらなり（むだだ、役にたたない）。

うつくし（愛し）（肉親に対する愛情がもと）かわいい、愛らしい。おとなし（大人し）大人びている。落ち着いている。

こころにくし（心憎し）（憎いほどすぐれている）おくゆかしい、心ひかれる。

さうざうし（あるはずのものがなくて物足りない趣）さびしい。

としごろ（長年、数年来）（「ひごろ、つきごろ」と合わせて覚える）☆助動詞の意味をつかむことも古文読解では大切です。

① 希望を表す……たし、まほし。

例 言ひたし（言いたい）。かくあらまほし（こうありたい）。

② 断定を表す……なり、たり。

例 春なり（春だ）。兄たる人（兄である人）。

③ 完了を表す……つ、ぬ、たり、り。

例 見つ（見た）（見おわつた）。夏は来ぬ（夏が来た）。

④ 推定、推量、意志を表す……らし、む、まし、べし、めり、など。

例 春来たるらし（春が来たようだ）。言はむ（言おう）。

⑤ 過去を表す……き、けり。

例 男ありけり（男がいた）。よき人なりき（いい人だった）。

⑥ 打ち消しを表す……ず。

聞こえず（聞こえない）。

\*他に使役（す、さす、しむ）、比況（ごとし）などがあります。

③ 係り結びの法則 助詞「ぞ・なむ」（強意）、「や・か」（疑問・反語）を受ける述語は連体形で結び、「こそ」（強意）を受ける述語は已然形（いぜんせい）で結びます。

（用言の活用は巻末の表参照）

例 川、流る。（連体形） 川ぞ、流るる。（已然形） 川こそ、流るれ。

④ 内容をつかむ 古文に限らず、現代文でも、会話文の中では、話し手の立場によって呼び名が変わることがあります。

⑤ 指示語をつかむ 普通指示されることははすぐ前にありますが、古文では一文が長いので、かなり前にあったり、指示されることは自分が長かったりすることがあります。注意しましょう。

⑥ 会話文を指摘する 古文では、会話文や思った内容がどこからどこまでかを指摘する問題がよく出されます。終わりははたいがい、「と言ふ」「と思ふ」ということはでしめくくられています。

⑦ 内容をつかむ (6)の要領で、まず、「中将」が思ったことが書かれている部分を見つめましょう。

⑧ 主題をつかむ 説話では、たいてい、最後に、そこで紹介されたエピソードから導かれる教訓、感想などが書かれている場合が多いものです。

⑨ 文学史の知識 「今昔物語集」は平安時代に成立した、日本最大の説話集です。鎌倉時代成立の「宇治拾遺物語」とあわせて覚えましょう。